現地通信

タイ国新国立図書館を訪ねて

石　井　米　雄

1

わたくしは，去る5月8日京都を出発，同日，ふたたびバンコクの土を踏んだ。今年の3月，センターの第2期計画について，現地研究機関と意見を交換するため，農学部の四手井綱英教授と，この国を訪れて以来，ちょうど38日ぶりである。

こんどの訪タイの目的は，東南アジア研究センターの「ビルマ・タイ研究計画」昭和41年度事業計画の一環として,「タイ国における，いわゆる農奴制(Phrai)と奴隷制（That）の崩壊過程」を，タイ語文献，とくにタイ国国立図書館所蔵の未刊資料によって調査することと，あわせてバンコク連絡事務所の仕事をすることである。

文献調査という仕事の性質上，今回のタイ国滞在は，その大半が，あの古ぼけた「ワチラウット文庫」と「ワチラヤン文庫」の薄暗い部屋のなかで過ごすことになるだろう，というのが，出発前のわたくしの予想だった。

ところが今度来てみると，5月5日というから，わたくしの到着するわずか3日前に，新しい国立図書館が完成し，タノム首相を迎えて，盛大な開所式を終えたばかりであることを知ったのである。

わたくしは，さっそく新図書館を訪ねてみることにした。場所はバンコクの西北隅，チャオプラヤー河に面したター・ワースクリーである。最近すばらしく立派になったシー・アユタヤ通りを西に進み，国会議事堂を右手に眺めながら，ラーチャダムヌン大通を突っ切ってサムセン通りに出ると，やがて左手に，タイ洋折衷様式の，堂々とした白亜の建物が目にとび込んできた。敷地は大分ひろびろとしている。20ライもあるだろうか。タイ風の，鋭角的な赤瓦の屋根が，強い南国の日ざしに照り映えて，まばゆく輝いている。王宮前広場の砂ぼこりが，容赦なく吹き込んできたこれまでの図書館とはけた違いの立派さだ。わたしは新しい仕事場の完成を心から嬉しく思う。

2

タイ国の「国立図書館」の歴史は，今世紀の初めにさかのぼる。1905年，チュラロンコン大帝ラーマ5世王は，先帝モンクット王の生誕100年を記念して，王宮のなかにタイ国最初の公開国立図書館を開設する。これが「国立ワチラヤン図書館（Ho Phrasamut Wachirayan samrap Phranakhon，英語名：The Vajirañana National Library)」である。

この図書館は，その成立の母体として，既存の3つの文庫をもつ。「ワチラヤン御文庫」，「仏教文庫」，「王室経蔵」がそれである。

「ワチラヤン御文庫(Ho Phrasamut Wachirayan，英語名：The Royal Vajirañana Library)」は，新図書館にその建物を継承した点と，蔵書の内容の点から見て，その後の図書館の発展に，最も大きな影響をのこしている。「ワチラヤン御文庫」とは，1884年，ラーマ5世王が，父王の遺徳を偲んで，王宮の中に開設した一種の「図書クラブ」で，王族や高級官吏が会員であった。「ワチラヤン」という呼称は，モンクッ

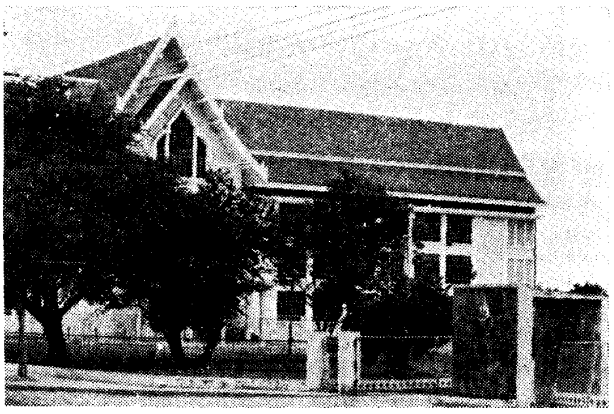


写真1　ター・ワースクリーの入口から新国立図書館をのぞむ

ト王が，即位前，僧籍にあったときの名にちなんだものである。この「御文庫」の蔵書は，当時市販されていたタイ語書を購入したもののほか，会員がそれぞれ持ちよってあつめた外国書などが主なものであったという。

「仏教文庫（Ho Phutthasasanasangkhaha)」というのは，もと，バンコクのベンチャマボピット寺院（いわゆる大理寺寺院）の学僧の研究のためにと蒐集した仏教典籍（各国版大蔵経など）をもとに成立した文庫で，1900年，さきの「ワチラヤン御文庫」の一隅をかりて開設されている。

「王室経蔵（Ho Monthiantham)」の歴史は古く，その建立は遠くバンコク遷都の昔にさかのぼる。ラーマ1世王の行なった仏教経典の「結集」は著名な史実であるが，この経蔵には，その時完成した三蔵の原本が納められていた。ラーマ5世の手で印刷刊行され，わが国にも多数もたらされた「タイ王室版パーリ経典」は，この経蔵所蔵の原本を底本としたものである。

以上3つの文庫の蔵書をあわせてつくられたものが「国立ワチラヤン図書館」である。タイ国初の公開国立図書館となった元「ワチラヤン御文庫」の建物が，手狭な上に，機能的でなく，種々不便であったことは，開設の当初から関係者によって指摘されていたところであった。そこで1916年，ナー・プラタート通りにターウオンワット館と呼ばれる新しい建物が出来上ると，「ワチラヤン図書館」は，さっそくここへ移転することになった。こうして，国立図書館がはじめて王宮の外に出て，民衆にとっても近づきやすい存在となったのである。

タイ国の図書館が，ラーマ5世のイニシヤティヴで生まれたことは上述のとおりであるが，タイの王室が，図書館事業にどれほど大きな関心をもったかということは，歴代の図書館長の顔ぶれにはっきりと現われている。初代館長のワチラウット親王は，やがて即位してラーマ6世となった。2代目のソモット・アモーラパン親王，3代目のダムロン親王は，ともにタイ国きっての学者であり，王族としての身分も高い。

1925年，ラーマ6世王が崩御されると，この文人王の全蔵書が，王位を継いだ弟王の手で，ワチラヤン図書館に寄贈された。ときの図書館長ダムロン親王は，これを機会にワチラヤン図書館の大改革を実行し，まず，その蔵書のうち，碑文をふくむ一切の写本をシーワモークピマン宮（現国立博物館構内）にうつし，これを「ワチラヤン文庫」と名づけた。一方蔵書のうちの刊本と，新しく目録に加えられたラーマ6世王旧蔵書とを，これまでの建物にのこし，これを改名して「ワチラウット文庫」と呼んだ。爾来，「国立ワチラヤン図書館」は，刊本の「ワチラウット文庫」と写本の「ワチラヤン文庫」の2つの文庫に分れることとなったわけである。

写真2　国立博物館の一部となっているシーワモークピマン宮，碑文が納められている

1933年，芸術局が新設され，国立図書館の業務一切が芸術局の管理に移されるにおよんで，「国立ワチラヤン図書館」は，「国立図書館（Ho Samut haeng Chat，英語名：The National Library)」と改称され，今日におよんでいる。

1947年には，ダムロン親王の蔵書の譲渡をうけて，「ダムロン文庫(Ho Samut Damrongrachanuphap)」が附設された。

図書館の利用者の数は，とくに第2次大戦以後，漸増の一途をたどっているといわれる。事実，280人しか収容できない「ワチラウット文庫」は，熱心な利用者がいつも廊下まであふれていた。蔵書が充実するにつれ，書庫もすでに飽和状態をこえてしまっていた。もともと4,000冊で出発した図書館が，そのままの広さで14万冊にふくれ上ったのであるからまことに当然の話である。こうした事情を背景として新国立図書館建設の必要は大分以前から叫ばれていたが，1961年頃からようやく具体的な準備にとりかかり，1963年には定礎式にこぎつけ，そしてこの度，ようやくにして開

写真3　ダムロン親王の蔵書をおさめたダムロン文庫

所のはこびとなったわけである。

3

新国立図書館は，バンコク市ドゥシット区のター・ワースクリーにある。ター・ワースクリー，つまりワースクリー舟着場というのは，王室御用艇専用の舟着場で，宮内庁の「舟運部」がここにある。図書館の敷地は直接チャオプラヤー河には面していないが，しばらく耳をすましていると，ポンポン蒸気の音が，のどかにひびいてくる。バンコクも西北のはずれに近く，町の中心からは大分遠いが，読書にはふさわしい環境だ。テーウェート運河をはさんで，南側にはタイランド銀行，タイテレビ局などが立ち並んでいる。

今度完成したのは図書館の本館と附属講堂あわせて16,000m² で，27,200m² の敷地の中央に横L型に建てられている。将来この右手に「国立文書館（Ho Chotmaihet haeng Chat, 英語名：National Archives)」と，「王立アカデミー（Ratchabanditsathan)」とが建てられる予定と聞く。

建設費4億3,000万円という本館および講堂は，それぞれ5階および4階建。エアコンディションの設備は一部にかぎられているが，風通しがよく，天井が比較的高いのでなかなか涼しい。

正面玄関を入ると，中央ホールに受付がある。閲覧希望者は，ここで閲覧票を作成してもらわないと閲覧室に入れない。NRC（National Research Council of Thailand）発行の身分証明書を提示すると，すぐに閲覧票を作ってくれる。閲覧票作成には，自動車の運転免許証に貼るのと同じサイズの 3cm×3.5cm の写真1枚が入要である。

出来上った閲覧票をもって，早速閲覧室をのぞいてみる。各閲覧室の入口の受付に閲覧票をあずけると，開架式の書庫に自由に出入りして，好きな本を読むことが出来る。ただし図書の館外持出しは許されない。マイクロフィルムサーヴィスが，この欠点を幾分なりとも補ってくれる。撮影料は一駒が15サタン（≒2円70銭）とのことだった。

1階の右手は，「新聞・雑誌閲覧室」である。タイ国内で発行される定期刊行物は，すべてここに納めることが義務づけられているそうであるが，さすがによく揃っており，保存もよい。バックナンバーの装訂も行き届いている。内務省発行の≪Thesaphiban≫なども1906年の第1巻から完全に揃っているし，官報も，1858，1874～1879，1888～と全部 available である。これはちょっと他所では望めない。

1階の左手は「一般図書閲覧室」である。辞書類，言語，美術，古典，小説，歴史，地理，紀行，伝記，理学，工学など，タイ語，外国語（圧倒的に英語が多い）の本がいろいろと並んではいるが，絶対数が不足しており，少なくともわれわれ外国人研究者にとっては一番魅力のない部屋である。

2階へ上ると，中央のホールに2組のカード箱がおかれている。右がタイ語，左が外国語（大半が英語）で，当図書館の全蔵書の総合カードが，著者名，著書名，件名の3種類に分けて納められている。カードの右肩の記号でただちに格納場所がわかる仕組になっているのは便利だ。分類はデューイ10進分類法によっている。

向って右手の閲覧室は「宗教・哲学・社会科学」である。社会科学はまだまだ貧弱で，やはり仏教関係，とくに各国版パーリ三蔵がこの部屋の中核をなしているといえよう。

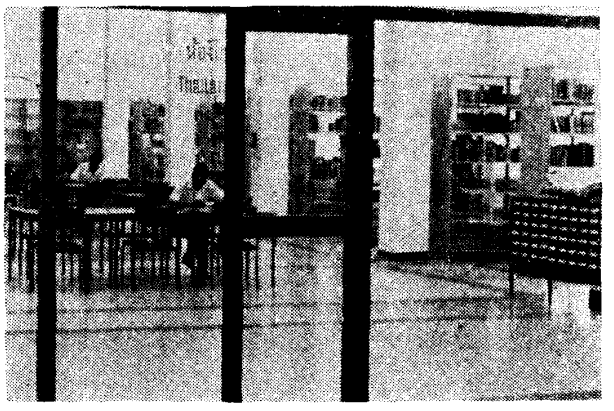


写真4　新国立図書館の内部，タイ国関係図書閲覧室

2階の左手は「アジア関係図書閲覧室」である。英語書が大部分。それもインド，ビルマ，セイロンなどが中心となっていて，たとえば中国関係などは，1段ぐらいしか見当らない。この辺の充実を望みたいところである。

3階の「タイ国関係図書閲覧室」こそは，この図書館のいわば本命であろう。タイ語だけでなく，タイ国関係の外国語図書がすべてこの部屋にあつめられている。ただし貴重書に属するもの（たとえば1873年版のブラドレー博士著タイ・タイ辞典）などはこの部屋の開架式書棚にはなく，4階の貴重書書庫（ここへ入るには特別の許可がいる）にしまってあるので，カードによって検索の上，係員に申し出なければならない。書棚を一見すると，あまりにがらがらなので一瞬失望しかけたが，カードをくってみて安心した。さすがによく揃っていて，町では手に入らない Nangsu Chaek なども，ほとんどあるようである。なおこの部屋におさめられている Nangsu Chaek のうち，国立図書館が版権を所有しているものについては，印刷後一定の部数の納入を定められており，これを3階の「販売部」で安く入手できることを知っていると，何かと便利である。

3階の右手は「参考資料室」。各種の写本が要領よく展示されていて勉強になる。

4階へ上るには館長の特別の許可が必要である。ここは2つに仕切られ，左手には各種の貴重書が，右手のエアコン設備のある部屋には，Manuscript and Inscription Section の管理の下にある各種写本（Bai Lan および Samut Khoi）が分類整理されている。

5階は倉庫で，蔵書の余部が入れてあるという。

各部屋を廻ってみての印象では，とにかく移転をようやく終えたばかりで，整理に目下全力をあげている最中という感じであった。しかし，いずれにせよこれだけの施設が完成を見たということだけでも，タイ国立図書館史上，画期的なことと言わねばなるまい。タイ研究の今後の発展のため大いに慶賀すべきことである。なおこの図書館は祝日のほかは一切休日なし，毎日8時30分から16時30分まで利用できることを附記しておく。

メサリアンの谷より

飯　島　　茂

タイ国における乾季の終りを告げる恒例のソンクラーンの祭りがやってくる。なかでもとりわけタイ国北部では毎年4月中旬になると，人びとは気狂いのようになってこの水祭りを祝う。この地方の3～4月におけるぱさぱさに乾ききったひどい暑さを経験しないと，水祭りの本当の楽しさは解らないだろうし，この祭りに示すタイ人の爆発的なエネルギーの根源がよく理解できないであろう。

ソンクラーンの祭りは元来春分の日を祝うタイ国の旧正月で，ビルマの水祭りとは同系統のものといわれる。この日は仏像，僧侶，両親，長老などに敬意と祝福のしるしとして，水をかけるしきたりがある。国王も宮中でみそぎを受けられ，町角では人びとがおたがいに水をかけあう習慣が古くからおこなわれている。しかし，バンコクではその慣行が過熱しすぎて首府としての機能がおちたり，外国人に迷惑だというので，現在は禁止されている。

だが，水祭りは北部各地方では今日でもたいへん盛んに祝われる。とりわけ古都チェンマイのソンクラーンは有名である。そこでは洋裁用の小型の霧吹きや手製の水鉄砲による可愛い放水から，果てはトラックに

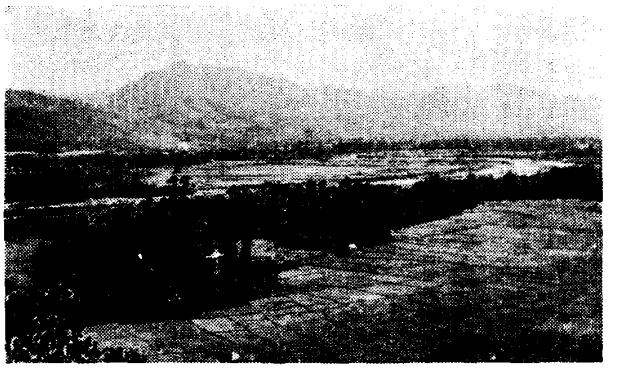


写真 1　メサリアンの谷，手前の林はティカニ村

ドラムカンを満載して，道を行く人びとにかけて歩く荒っぽいソンクラーンまで，チェンマイの人はいつにない情熱を傾ける。なかには水の中に氷をいれて，着飾ったチェンマイ美人がふるえあがり，悲鳴をあげるのを見て喜ぶいささか悪趣味のものまである。ここまでくると，ソンクラーンの水のかけあいは本来の意義を失い，“報復”が“報復”をうむいたずら的様相を示してくる。しかし，いつもはたいへんに行儀の良い北タイ人の社会では時にはこのような思いきった開放感を味わうことも必要なのではないかと思う。ミス・ソンクラーンの選出をピークとする水祭りはチェンマイでは3日間派手に続き，タイ国各地から多数の観光客を集めるのである。

ところで，多分にショー化したチェンマイにおけるソンクラーンの祭にくらべて，田舎の水祭りは寺院の中でも町角でも素朴ながらなかなか熱狂的に祝われる。チェンマイでは都市としての秩序を維持するために市当局が水祭りをある程度コントロールしている。たとえば，その期間を4月13日から15日の3日間に限定するとか，日没後の水のかけあいは禁止するとか，他人に危険を与えないためにビニールの水袋を投げつけることを禁止するなど，人びとがほどほどにソンクラーンを楽しめるようになっている。

しかし，チェンマイの町から一歩出ると，そこにはコントロールされない本来のソンクラーンが残っている。そこでは天下晴れての無礼講が延々と続く。4月10日を過ぎると，田舎の子供たちはもうじっとしていられない。バケツに水をいれたり，ビニールの袋に水をいっぱいつめて，道路のわきで車がやって来るのを待ち伏せる。なかでも一番鴨になるのはトラックをちょっと改良した無防備なバスである。容赦なく両側からぶっかけられる水にずぶぬれになりながらも，バスの乗客はただ苦笑するのみである。もっとも，なかにはバスの車掌などが水を用意していて時たま反撃することもある。

わたくしが住んでいるタイ国西北部のメサリアン地方ではそれがなんと4月の19日ぐらいまで延々と続く。しかも，水祭はチェンマイとはことなり，早朝から夜半まで続き，熱狂した青年たちはよその家の2階にまで水をまいて歩くのにはいささか閉口する。その上，人にあびせる水の水質には保証はない。どんな泥水でもよいのである。

メサリアンの北タイ人に輪をかけたのが平地に住む仏教化したカレン族のソンクラーンである。カレン族は元来精霊信仰をしている。仏教の影響のないカレン文化はタイ人やビルマ人の文化とはたいへんにことなっている。現在でもメサリアンの町からわずか20キロメートルほどしか離れていない山地に住むカレン族の間では，ソンクラーンの祭りはまったくおこなわれていない。しかし，山地から平地に移り住んで，北タイ人やシャン族と接触することにより，仏教的文化の影響を多少でも受けたカレン族は平地民と同様に盛大な水祭りをおこなう。いやそれどころか，いつも娯楽の少ないカレン族はこの時とばかり，派手に，景気良くこの祭を祝う。そのアナキーぶりはわが国の“非キリスト教的”クリスマスを思わせる異常さがある。

ただ，平地カレン族でも大部分はまだ完全にタイ化はしていないので，北タイの慣行とは多少ずれがある。タイ的なスタンダードから見ると宗教行事に頼りないところがある。たとえば水祭りの3日前に調査村に行って，いつから祭りが始まるかと村人に聞くと，ほとんどの者が正確な日どりを知らなかった。5人のカレンにそれを尋ねると，6通りぐらいの返事が返ってくるのには面くらった。当時遠路はるばるメサリアンを訪問してくださった大阪市立大学法学部神谷不二教授もわたくしとカレン族とのやりとりを目撃されて，たいへん驚かれておられたようである。

しかしながら，とにかく調査村のティカニにソンクラーンの祭が近づいてくる。4月12，13日頃になると，村人は村はずれのタート（仏塔）の所でおこなうソンクラーンの儀礼のために，飾りやのぼりなどを作って準備を始める。北タイ人のソンクラーンに遅れること3日，4月16日にようやくカレン村にもソンクラーン祭りがやってくる。もっとも子供たちは“本当の”ソンクラーンが待ち切れずに，数日前から人に水をかけ始めてはいた。当日の午後，村人はいっせいに村を出発して1キロメートルほど離れた裏山のタートの所に集る。老いも若きもタートの前に到着するとまずひざまずき，タイ風に三拝する。さらに，スエ・ドックという玉串のような木の葉をタートに捧げる。やがて太鼓やかねを持った若い男の一団がやってくると，かれらを先頭に村人はタートの周囲を仏教賛歌を歌いながら何回も何回もまわる。

この村にはワットがないので，南隣りにある北タイ人の村トングレムから僧侶（トウチャオ）と導師（アチーン）が招かれる。太陽がすでにビルマ国境の山に傾いた頃，かれらはタートの

所に到着する。儀礼はまったく仏教式に静かな読経に終始する。例によるカレン式精霊信仰のように，豚や鶏をいけにえにする派手な血なまぐささはさらにない。儀礼が終ると，カレンから僧侶に金と食物が寄進され，それを使い走りの少年が受け取り，一同山をおりる。

写真 2　タートのまわりを合唱しながらまわるカレンの少女たち

このようにタートにおけるソンクラーンの儀礼が終ると，カレンの村における水祭りが本格化してくる。水かけの無礼講である。誰れかまわず水をかけて歩く。このような時には逃げても無駄である。足の早いカレンはどこまでも追いかけてくる。ノートやカメラを持っているわたくしなどはかれらのまたとない攻撃目標である。わたくしはすべてをあきらめて，調査道具を全部ビニールの袋にいれて歩く。しかし，体は水をかけられるので1日中ぐっしょりである。気温は高くても湿度がきわめて低いので，屋内や日蔭でおこなう調査では鳥肌になり，寒さが身にこたえる。やがてカレン族もわたくしの立場を良く理解してくれて，ノートを開いている間は水をかけないという暗黙の紳士協定が成立したのは幸いであった。

水祭りが数日間も続くうちに，村人のかなりの者が鼻声になったことに気付く。水をかけたりかけられたりしながら，かざ声を出しているカレンを見ていると，気の毒というよりはむしろユーモラスでさえある。だが，そう思っていられたのは最初のうちだけであった。わたくしは自分の薬箱のかぜ薬やせき止め薬があっという間になくなり，いささかあわをくう。ソンクラーンの最後の1日は大人はほとんどへとへとになり，家にたいていこもってしまう。しかし，元気の良い青年男女や子供たちは疲れを知らずに最後の日まで水をかけあう。まったくかれらの馬力には驚くほかはない。娯楽のほとんどないこの村ではお祭りが数少ない楽しみのひとつなのであろう。かくして，ソンクラーンの祭りは無事終り，カレン族は雨季の到来を待つ。

5月3日，ビルマ国境の山波にいつもとは少しちがった黒い入道雲がむくむくと湧きあがった。やがてそれは雷鳴とともに大空をおおい，ものすごい豪雨となる。過去2カ月あまり大陸性盆地気候の殺人的暑さに悩まされていたわたくしたちにとってはこの雨のなんと心地よく快的であったことか。ぱさぱさに乾き切った大地は吸取紙のように雨を吸収する。土ぼこりをかぶってすべてが褐色になっていた自然に緑がよみがえり，万物は蘇生する。窓から外を眺めていると，ふと芥川竜之介の“雨蛙おまえもペンキのぬりたてか”という句を思い出し，久しぶりに日本の風物をなつかしく思う。

この地方のひどい暑さと乾燥に苦しんだことのある者ならばだれでもがもの皆よみがえる雨季入りの景色ほどすばらしいものはないと思うだろう。それになによりも気温がさがるのが良い。雨が降り出すとぐんぐんと涼しくなる。1時間もすると鳥肌がひどくなる。あまりうすら寒いのでふと壁にかけてある寒暖計を見る。まだそれでも30度Cを指している。しかし，わたくしたちは快的である。前の家のミャオ犬のミー君（熊という意味）さえも生きかえって，泥水の中ではしゃぎまわっている。

だがこのように雨を楽しんでいたのはほんの束の間であった。ベンガル湾からビルマの山々を越えて吹き寄せるモンスーンの雨が数日も続くと，さすがに乾ききった大地も水を受けつけなくなる。道のくぼみには大きい水たまりができて，水牛やあひるに格好な水あび場ができる。やがて道路と水田の区別がつきにくくなる。こうなるともういけない。乾季にはおおいに機動性を発揮した農村調査には不可欠のわがホンダのオートバイももうどうしようもなくなる。泥んこになった田舎道の中をゆうゆうとかっ歩している水牛を横目でにらみながら，スリップをしてただあえぐばかりである。やはりオートバイと水牛とではここの自然に対するエコロジカル・アダプテーションの歴史の層の厚さがちがう。

雨季がこのように本格化する頃にわたくしの調査期間は後わずかに1カ月余りになる。1964年から65年に

写真 3　カレン族の水祭り，年1度の無礼講だ，思い切り水をかけあおう

かけておこなった山地カレン族の補遺調査が残っているためにわたくしは間もなくメサリアンの谷から去らなければならない時が来る。そのために平地カレン族の調査の追い込みにはいる。

その頃のある日のことである。家の近くに住んでいる中年の巡査がやってくる。かれはいつもお茶を飲みに来たり，時には胸にかける仏像のお守りなどを持ってきてわたくしの仕事の成功を祈ってくれる。この好意的な巡査の陽気なところや思いやりがわたしは好きである。例によってかれは小1時間ほど家で遊んでゆく。席を立ちながら，地声の大声を少し落して20年前のことを話し出す。それはこの地方を通過した日本軍のことである。かれの話によると，日本軍がビルマの英軍を攻撃した際にもこの地方を通って行き，その時に作られた道はいまだに土地の人からタン・ジープン（日本人の道）と呼ばれているという。中腰になりかけた巡査は一段と声を落して，敗戦時の日本軍の悲惨きわまりない姿を再現する。かれは続けて，シッタン川の戦いに敗れた日本兵はカヤ川やカレン川を通って，メサリアン北方数10キロメートルのコン・ユアム地方に逃げ込んできたという。かれらの大部分はメ・ヨムの流れに沿って南下し，メサリアンを通ってチェンマイの方向に向かったようである。戦いに敗れた日本兵の大部分を悩ましたものはマラリアやアメーバー赤痢，それに加えて飢餓であった。メサリアン地方も食糧不足であったうえに，日本兵はすでに物を買う金もほとんど持っていなかったようである。このような物語りを聞いてはじめて，メサリアンの警察の前に現在でも野ざらしになっている日本製の重機関銃の歴史がおぼろげながら解ってくる。かれは立ちあがりながら“あなたとはそろそろお別れだから言っておこう。メサリアンでは数100人の日本兵が死んだですよ。”わたくしは聞く“何人位ですか”，“5～600人かな。”とにかく同氏の説明によると，ライ・コン（かなりの数）の日本兵の死体を埋めたのを見たというのである。“お墓はどこですか”，“墓などありませんよ”，“ではどこに埋めたのですか”，かれはその場所は飛行場の東側の林の中だと教えてくれる。一見平和そうに見えるこのメサリアンの谷に，歴史の爪跡がこんなになまなましく残っていることを知り，わたくしは襟をただす思いであった。タイ国の西北部のこんな辺地に，戦後20年余りもたったというのに，だれ1人おとずれる人もなく眠る数多くの同胞がいると知り，まったくやりきれない思いになる。

翌日わたくしは町に行き酒と線香を買い，スコールのあい間をぬって飛行場に行く。飛行場といっても赤土をならして平坦にした広場である。周囲はチーク林の2次林のようで，1～2メートルの灌木と雑草がびっしりとはえている。まったく人気もない。蛇やヒルに気をつけながら，灌木林にはいってみる。見わたしてもすでにそれらしいものはない。20年の歳月がすでに流れている。よほどの大発掘でもしない限りは遺骨の発見は不可能であろう。あたりの草や木は久しぶりの雨でうっそうとしている。どこかで蛙の押し殺したような声がする。その一隅にわたくしは線香をさし，火をつける。煙は湿った空気にたなびいて，木々の間を流れてゆく。家内はどこからか金魚草ににた野の花をつんできて，線香のそばに置く。そのあたりに酒をまくと，赤くにごった水たまりに流れこみながら，あたり一面にアルコールのあわい香りをまき散らす。しばしこうべをたれる。やがて，顔やうでにむらがってくるカやブヨを追いながら林から出ると，おりから雲間からさしこんでくる西日が目に痛かった。家内は“この場所の景色が良いのがわずかな救いね”とぽつんと言う。しかし，わたくしはそれに答えずにオートバイのエンジンをかける。次の調査でまたもどって来る時には，内地の香りのある物でも持参して手向けよう……と思いながらアクセルをふかす。

ドンキレクの近代主義者

― 部落長のアーマッド ―

矢　野　　暢

1

ドンキレク部落の部落長（プーヤイバーン）のアーマッドは，変わり者だ。もっとも，部落民は，かならずしもかれを変わり者とはいわない。気性が激しく，反応がす速いかれの性分を恐れてか，表面上は，かれにけちをつけるものはだれもいない。しかし，外部のものの目には，かれは，やはり，どことなく変わっている。毎日，夕方になると，かれは，自宅から少し離れたゴムの畑に行き，ヤシの実のわんに米を入れて，鶏についばませる。ついばむ鶏はいつも1羽だけである。1羽の鶏を可愛いがる情景には，なんともいえない無邪気さとおかしみとがある。このアーマッドが，ある日，とんでもないことをしでかした。さすがの部落民も，そのときは，かれを変わり者と呼んではばからなかった。ドンキレクの第5集落の西のはずれに1本の大きなマンゴーの木が生えていた。この木は，ドンキレク住民全体の共有財産だった。なぜならば，この木にむかって kho phon（願かけ）をしたら，それがかなえられるからだ。アーマッドが，なにを kho phon したかはわからない。しかし，どうにも思うようにことが運ばなかったのだろう。かれは，その日，愛用のなたで，その神聖なマンゴーを切り倒してしまったのだった。住民は，かれを変わり者と呼んだが，かれをとがめようとはしなかった。なぜなら，かれと同じように，空しくはかなく kho phon した経験は，だれにもあったからだ。

写真 1　鶏にえさをやるアーマッド

アーマッドは，いうまでもなく，イスラム教徒である。そのくせして，酒は飲むし，祈祷もずるけがちである。だからドンキレクのトイマム（導師）は，かれを，かねてから嫌っている。トイマムにいわせると，アーマッドは，徳も神の祝福もなにもない可哀想な男なのだ。この無法者の部落長が，神聖な木を切り倒したことは，ドンキレクの歴史のうえでは，ひとつの画期的な事件であった。といっても，なにも神聖な木が1本失なわれたからというわけではない。神聖な木を切り倒した事件は，先例があるのだ。かつて，第4集落に，1本の巨木が繁っていた。住民は，phi が宿っていると信じ，畏れていた。ある男が船の材料に売ろうとして切りかけたが，なたの刃が幹にはねかえされ，どうにもならなかったという。この木は，結局，メッカから帰って来たひとりの若い男に，すいすいと切り倒されたという。その男は，いま部落の子供たちにコーラン読みを教えているマーン先生である。マーンは，部落きってのインテリだ。そうした神聖な木を切り倒せるのは，マーン先生のような，宗教的な徳を積んだ人でなければいけないはずなのに，のんだくれの部落長が，それをすいすいと切り倒したのだから，みな一応びっくりしたのだった。

住民は，ふつう，アーマッドのことを，ナーイバーン・マッドと呼ぶ。マッド部落長という意味だ。あるいは，マッド・ナーイバーンともいう。マッドという名前は，ドンキレクではざらにある名前だし，いちいち，マッド・ロンシー（精米所のマッド）とか，マッド・スワンソム（みかん畑のマッド）とか，形容句をつけて区別しなくてはならない。形容のつけ方が天才的にうまい男がひとりいるがそのかれがアーマッドを，マッド・ナーイバーン（部落長のマッド）と呼ぶので，他の連中もそれに従って，そう呼んでいる。アーマッドの親父もかつて部落長だった。しかし，あるとき強盗に射ち殺されて死んだ。要職の継承が世

写真 2　太鼓を叩いて住民を召集するアーマッド

襲化する傾向をもつドンキレクでは，父が死んだあと，成人したアーマッドがなかば自動的に部落長になれても不思議ではなかった。アーマッドは，だから，部落の「名門」の血をひくわけだ。かれの苗字はビンドゥレムである。ビンドゥレムというのは，部落でもっとも多く数えられる苗字だ。タイ国で苗字制度が一般的に採用されたのは，ラーマ6世の御代1916年のことだが，その折，郡役所からの命令で苗字をつけるよう頭をひねったあとで，部落のいちばん偉い一族が，このビンドゥレムを選んだといわれている。タイの農村では，イエの系譜は，社会のさほど重要なファクターではないので，苗字にこだわるのは不賢明かも知れないが，それでも，血縁関係を知るうえでのひとつの手掛かりにはなる。ドンキレクでは，苗字の問題が案外話題になることが多い。それというのも，南タイ社会の特徴として，かなり閉鎖的・孤立的な性格をもっていたドンキレク部落に，社会的流動性の高まりとともに，他の社会の人間がはいり込んで来るようになり，それと共に，耳慣れない苗字が部落に入って来たからだ。プアサレとかビンヌイなどは，かつてここにはなかった苗字である。また，仏教とムスリムとが混在するタイイスラム地帯であるだけに，仏教徒との通婚もままおこなわれ，その結果，本来仏教徒がつかった苗字もはいって来ている。部落民の一部がつけているサイパクディー，ダムシーとかチョープンガームとかは，そもそもイスラム教徒の苗字ではない。

2

アーマッド・ビンドゥレムは，その点，生粋のドンキレク子なのだ。このかれが，酒をのんだり，khophon の木を切ったりして，部落古来の約束事にそむきがちであるのは面白い。アーマッドには，本妻のほかに，第二妻がある。第一妻と第二妻とはいたって仲がいい。なぜなら，アーマッドが，待遇一切平等のルールをきちんとまもっているからだ。かれは，5日交替で泊り家を移している。ドンキレクでは，第二妻をもつばあい，1日交替がふつうで，5日交替というルールは珍しい。かれは，第二妻とのあいだに，一女をもうけている。この娘は，髪に野花を飾ったりする趣味のいい美少女なので，村の若物に評判がいい。もっとも，木登りも得意である。去年の秋のこと，トイマムの息子がこの娘にいたずらをしかけて失敗，そのことがアーマッドの知るところとなって，トイマムとのあいだがますます剣呑になった。アーマッドは，部落長だけあって口が達者だし，きまり文句をいうだけのムスリムの導師ではたち打ちできない。頭の回転が早い上に，思ったことをずばずば口に出す。トイマムは祈祷堂での大事な演説のときには，きまって足をがたがたふるわせる気の弱い男なのだ。

国家全体として，本来的な形でのムスリム教団組織が成立していないタイ国では，ひとつひとつの村落単位でのトイマムの役割が，たいへんな比重をおびている。タイでのムスリムの組織化は，内務大臣→県知事→ムスリム県委員→トイマム，という具合になっていて，政治的統合の趣旨が先に立っている。ムスリム県委員にしても，トイマムと内務省機構とのリエゾン機

写真 3　ザカットを受けるトイマム

能を働くだけの存在でしかない。すべてが政治的なのである。そこで，ひとつひとつの村落レベルのトイマムが，大きな役割を働かねばならないことになる。トイマムがしっかりしているところでは，村の宗教的秩序は立派な規律をもち，しっかりしていないところでは，規律が乱れてくる。

アーマッドとトイマムとの喧嘩は結局，アーマッドがトイマムをソンクラーの町にある郡警察署まで連れて行き，そこで話をつけるところまでいった。トイマムは，そこでもがたがたふるえたに違いない。かれは部落長に，息子のいたずらの慰謝金を払わねばならなかった。アーマッドは，トイマムがそれほどこわくないのである。

アーマッドは，月に1度郡役所でひらかれる村長・部落長会議には，村長（カムナン）のお供をしてかならず出席する。その日，かれは制服を身にまとい，いつも裸足のくせに靴をはき，村長の家まで4km歩き，村長の車に便乗して町まで行く。ドンキレク部落はパウォン村にある。パウォン村の村長は，カムナン・ヨクという名で親しまれ，ソンクラー県の知名士のひとりである。ゴム園の農業労働者から叩き上げたたいへんなやり手で，いまでは不可能ということを知らない男になっている。ソンクラー県第2の村長といわれるが，第1になれないのは，かれよりうわての村長がひとり健在だからだ。その第1の村長は，内務大臣プラパートと知己関係にあるのに，ヨク村長は，残念なことに，内務次官とかすかに知り合っているだけである。アーマッドは，このヨク村長を尊敬している。レトリックに満ちたさわやかな弁舌，社交性，威厳，たいへんな財産，それにスマートな近代性……経済合理主義一本で生きて来た偉大なる個人主義者ヨク村長の特性のすべてが，アーマッドを圧倒するのである。アーマッドには，それらの特性に感応するだけの素地があるのだ。部落長として，町に出る機会が人一倍多い。偉い役人に会う機会も多い。町に出ると，色彩映画もあれば，酒もある。タイの役人は，おしゃれだし，派手に遊ぶのが好きである。アーマッドは，これらのことどもをすべて知識として知っている。

郡役所の会議から帰ると，金曜日のプラチュム（部落民会議）で，郡からの連絡事項を集まった男衆につたえる。そのときの口調は，ヨク村長のそれに似ているし，威厳に満ちてもいる。プラチュムがおわると，

写真 4　ドンキレクを訪れたヨク村長

形通り祈祷をおえ，家に帰り，酒をのみ，そして，日暮れになると，1羽の鶏にえさをやるのである。

3

ムスリムの社会は，聖典の教義の解釈によって秩序づけられる神政的社会である以上，どこのどんなちっぽけなムスリム集落にも，司祭者づらした「インテリ」がいるものである。南タイの片隅にささやかに位置するドンキレク部落にも，ムスリムのことならなんでも聞いてくれ，といいたげな顔つきのインテリが数人いた。先代のトイマムを勤めて引退したトジレ爺さんは，私に面接を受けるたび毎に，むつかしいアラビヤ文字の本をとり出してきて，読んできかせてくれた。通訳として始終私につきそっていたのは，言葉のもっとも極端な意味において世俗的なサニット青年だったが，トジレ爺さんのこのお説教趣味をきらった。しかし，サニットの個人的評価の如何に拘らず，爺さんは，部落のインテリ中のインテリなのだ。いまのトイマムは，このトジレの女婿であり，トジレの威光でトイマムになれたのだが，やはり，ムスリムについての物識りで，本もかなりもっている。

これらのムスリム型の「インテリ」のほかに，一風変わった「インテリ」がひとりいる。暇があると茶店に来て，腰に差した小刀でひとの頭やあごを剃るのが趣味で，私もときどきかれにひげを剃らせた。石鹸などあろうはずもなく，じかにぞりぞりやるので少し痛いが，かれのナイフはよく切れる。かれの頭の働きも，その小刀に劣らず鋭い。部落民は，まだ33才のこのバンレップ青年を，次代のトイマムと目して尊敬している。バンレップは，既にメッカ詣をすませ，またパタニのムスリム学校で学んだ経験をもち，その点ではやはり部落でも一級のムスリム型「インテリ」であ

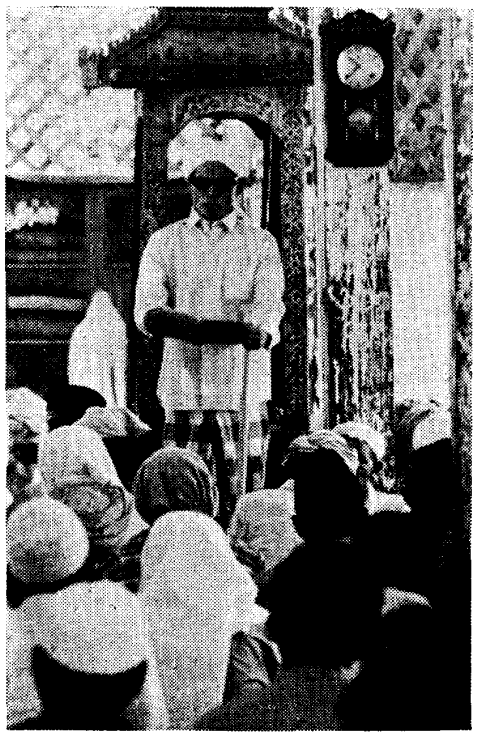


写真 5　祈祷堂でコーランを朗読するバンレップ青年

るのだ。しかし，かれがほかの連中と少し違っているのは，たとえばタイ語が皆目読めないトジレ爺さんなどと違い，タイ語がすらすら読めるし，それにおおかたその部落民にはわからないラジオ放送の言葉も完璧に理解する点である。アーマッドは，このバンレップ青年をなぜか苦手としている。

ある日の午後，茶店で，このふたりがばったり出会い，喋り好きのふたりは，馬糞臭い紅茶をのみながら話しはじめた。私は，傍で，一部始終を聴いていた。ふたりは，ふとしたきっかけから，khwa·m charə·n（進歩）とはなんぞや，という珍しく高まいな議論をはじめた。私が，そういう話題に導いたのだったかも知れない。アーマッドもバンレップも，いかにもインテリらしく，khy·wa·（つまり）という言葉を幾度もつかったあげくひとつの共通した結論に達した。かれらは，「khwa·m charə·n とは，われわれが tha·na をあげることである」と表現した。tha·na とは，身分とか地位とかいうニュアンスの言葉である。ふたりは，奇しくも同じ考えに至ったようだったが，その実，心の底の思惑は少しずつ喰い違っていたのだった。というのは，「tha·na を上げる」ということの意味を，バンレップ青年のほうは，メッカに行ったり，ポノ（私設の宗教学校）を開いたりすること，と考えていたのにたいし，アーマッドのほうは，同じ表現で，たとえばヨク村長のような tha·na の獲得を考えていたのだった。つまり，バンレップは，あくまでも宗教的論理において tha·na の高低を考えるのに反し，アーマッドは，脱宗教的な社会論理においてそれを捉えようとしたのだ。しかし，だれの tha·na を問題にするのか，社会にどんな tha·na がありうるのか，tha·na を上げるにはどうしたらいいのか，バンレップにもアーマッドにも，そこまで掘り下げる訓練はできていないようであった。

それから2，3日して，アーマッドの親戚の家に不幸があった。ひとりの中年者が子供を残して死んだのだった。1週間後，トイマムの手で遺産分割がなされ，以下のような具合に4人の子供が遺産を受けた。

	宅地	水田	水田	畑地	
1.（女）	—	$2\frac{1}{3}$	—	$2\frac{2}{3}$	
2.（男）	—	—	$1\frac{1}{2}$	—	
3.（男）	$\frac{1}{2}$	$2\frac{1}{3}$	—	$2\frac{2}{3}$	
4.（男）	$\frac{1}{2}$	$2\frac{1}{3}$	—	$2\frac{2}{3}$	（単位：ライ）

そばにいあわせたアーマッドに，「土地の規模が小さくなったね」というと，「昔は，土地はとり放題だった。ひとりで50ライ，30ライの畑地をもつのはふつうだった。日本軍が来たころから，土地が値段をもつようになった。もう今では，ドンキレクには，未開墾の土地はないし，兄弟間でも土地は売買されている。」と，部落長らしく，事務的に返事した。しかし，アーマッドは，まだ余裕ありげな口ぶりだった。「俺の子供が大きくなる時分までは，土地には困ることはなかろう。」

恐らく，アーマッドには，tha·na をあげることがどんなにたいへんな課題なのか，よくわかりっこないだろう。しかし，tha·na が上がらないからとて，kho phon する木も，もはやないのである。トイマムと仲良くするよりは，やはり酒に浸りたいだろうし，ヨク村長を憧れたがよくもあろう。アーマッド部落長は，やはり，よかれあしかれ，少し変わっているようだ。かれは，当年とって48才，まだ老い込む年令でもないから，これからもいろいろ変わったことをするだろう。そんな運命にある感じだ。

バンゲランゴ

今立源太良

1

プリアンガンとは御霊の国の謂らしい。西ジャワ山岳地帯を擁し，その西北隅に Pangerango 峰がある。全山原生林に被われ，特異な高山植物の存在でつとに名高い。学者の寵をえて，早くも明治25年にその一部が，大正14年には全山保護区域に指定されている。集積された資料記録も少なからず，熱帯圏の中ではよく調べられた山のひとつに数え込まれている。

そうした記録を，二つ，三つと覗いてみて，私は登ってみたいと思った。それに熱帯アジアでの土壌動物の研究は，特に基礎の段階で，手ひどく立遅れている。少しでも他の領域の水準に近寄るには，足場，手懸りになる記録が多い地域を出発点にしたらよかろう。いわんや Pangerango は残された業績の豊富さに加えて，標高 3,022m。縦にも横にも要領よく利用できるではないか，という慾もあった。当然，昨年のジャワ島調査旅行（本誌4巻1号111～118頁参照）に区切りがついたところで，私は，ひとり別れて，この山を目指すことになる。

2

8月19日早朝，車はジャカルタから南へ，バンドンへの街道をたどる。プンチャ峠を越すと，チパナスの村である。ここから，西へ登ってゆくと，海抜 1,400 mの山腹に，チボダス植物園がある。これは，ボゴールの分園で，園の中央まで，車が入る。

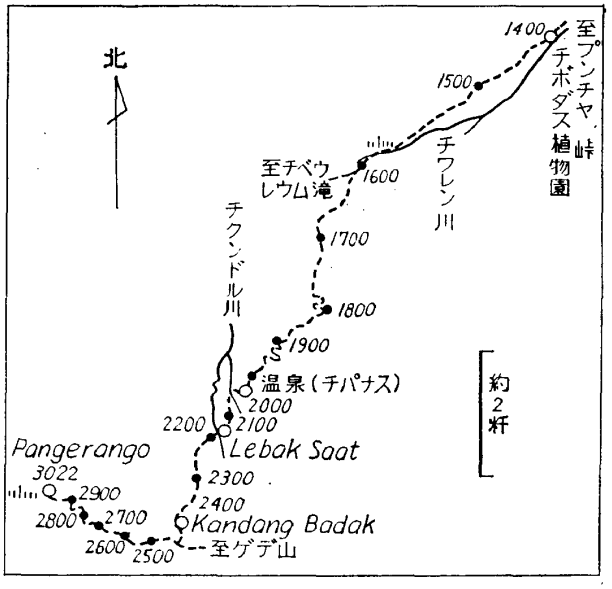
ここまではちゃんとした原生林らしいものはほとんどない。手ひどく森が伐られ，ひらかれて，田畑が続いている。

園の背後から保護区域が始まる。分園責任者 Nengah Wirawan 氏の配慮で，3人の随行者が選ばれた。植物園在勤28年，45才の Noerta 老。一見したところ，吉井先生よりは15は年長といった感じの篤実，博識の士である。草木の指南役として，荷持の Tjarwa, Suhendra 両君の指導にも心を配っておられた。Nengah 氏が，「外人は規定額以上の心付を出すので，私共の研究上の使用に支障を来たす」といわれたので，「下山の後，同氏立会の下に一切の支払いをしたい」と申し出たところ，氏はこれを煩わしとせず，むしろ歓迎された。お蔭で私は山の中では，専心自分のことだけに打込むことができた。

6時15分，植物園を出て森に入る。熱帯降雨林の典型と申すべき，見事な原生林である。道も手入よく，大台ケ原の緩やかな登り道をたどっている感じ。樹名を表示する札もかなり整っているが，何分いずれも樹冠高く，見上げても黒緑の重り合いが眺められるばかりである。行くこと30分余，どんぐりが目につくようになる。Noerta 老によれば *Quercus pallida* の実であるという。流れに沿うこのあたりでは，路上にうろうろする虫が目障りになる。マダラチョウ，ジャノメチョウの類の魯鈍な行動を示す蝶が多いせいであろう。もっともこれは日が昇り切ってからのことで，早朝には出てこない。

7時10分，森が切れて Pangerango の頂を望む。

私はここまで来て初めてその頂を見た。すぐに再び暗い降雨林に入る。*Schima noronhae* の白い花弁と *Castanopsis javanicus* の毬が，どんぐりに混り始め



パンゲラゴ付近概念図

る。上は暗く，オオタニワタリや *Zingiberaceae* などが，樹幹の列のところどころに変化をつけているばかり，しかも上り勾配とあっては，路傍のものしか，印象に残らなくなる。ツリフネソウやヒヨドリバナの白や斑入の花と共に，すみれがおびただしい。Noerta 老は *Viola serpens* という種だと教える。氏は中井猛之進先生の薫陶を受けた由で，この地の植物に関する造詣が深い。私より1年半ほど前にこの地に来られた黒川逍博士が，今もなお「あのなんでも知っている」という註付で，氏のことを話されるのを聞くと，かすかな木もれ日の中で，倦むことなく，じゅんじゅんと説き語った Noerta 老を思い出す。*C. javanicus* の幹を指しながら，この種についての相当に長い講釈を承ったが，今私の手控えを見直してみると「円尻扁平の栗，1,700～2,000m」としか記してない。*Quercus* や *Schima* は 2,200m あたりまで分布し，周年，花や実が見られるという。雨量には季節変化があるが，気温は大略一定である。*Schima* にしても，乾季の今は，少し花が小さくなるだけのことらしい。黒川博士からの伝聞によると，チボダス植物園で，3月，琉球つつじが咲いていたので，きいたら年中こうですよといわれた由。私も本館前で花も実もつぼみも揃ったマンリョウを見た。幸にしてソメイヨシノには花らしいものが全くなかったが，かように専門家に質問する場合はいいとしても，普通ものをきく時に，気になって仕方がないのは，言葉の裏打になっている心の文化史を知らぬことである。ゆかしい伝承の香りを，嗅ぎ分けて，記録を採ることなど，思いもよらぬ。*Rafflesia* についての，えたいの知れぬ聞取書など，事実と語りが交錯しているようで，私にはどうしようもない。

8時30分，標高2,000mに近付き，*Pandans* を見なくなる。ヘゴの類は山頂近くまで多く，このあたりから梢のサルオガセが目立ってくる。もちろん，樹幹は例外なく苔に被われている。再び木立が切れ，明るい日の光の下に，展望が開ける。山頂が近付いてくる。斜面に温泉の湧口が並び，湯煙と共に路を越え，滝となって流れ下っている。45～48°C。周囲に喬木がないのは，これのせいかもしれぬ。ここもチパナスという。湯本，湯元の類であろう。ほどなく森に入って30分，さいの河原のような所に出る。Lebak Saat という。ここでもチョウが目立つ。9時30分，屈曲の多い登り道が続くようになり，巨木が減り，明るい林に変ってゆく。梢にはサルオガセがなびき，シャクナゲ，シラタマノキ，コケモモの類が目につき始める。

標高2,400m。Kandang Badak には10時到着。マンリョウの一種 *Ardisia javanica* が道から少し入ったところで見つかる。丈4mばかり。つぼみも花も実もある。この地のマンリョウの類の巨大なのは，ボゴールでさんざん見てきたので，この程度の大きさでは，当然という気になってしまう。

Kandang Badak は少しくきりひらかれていて，植物園管理の山小屋がある。平素は無人で，気象観測は久しく中絶したままらしい。建物はかなりしっかりしていて，20人位は楽に収容できそうである。ここからも山頂が望める。このように開けたところでは，飛びまわる虫が目立つこと，Lebak Saat と同様。アゲハやシジミチョウの動きを目で追っていると，森に近寄ると樹冠に触れんばかりにたゆたい，その上をゆく。生い茂った林内で，華やかな動物の姿に，触れぬのも当然である。

ここで，ゲデへの登山路と別れる。この火山は人気があって，乾季，特に8月には少なくとも50人は登るらしい。私の下山日が日曜に当ったので，かなりの登山客に会った。白人が多く，総数10名ばかり。ゲデへはちゃんとした道がついているが，Pangerango 側にはない。こんなところで裸の山に登る人の気持が判らぬが，先方も曲りくねった樹の下を這い登るのは，狂気の沙汰と思っているかもしれぬ。

山頂まで標高差600m余。90分で山頂に達したが，弥山の聖宝八丁を，多少意地悪にした程度である。這うことが多いお蔭で，かの高名のサクラソウ *Primula imperialis* などすぐに気がつく。キンポウゲの一種 *Ranunculus difisus* の黄花，*Dendrobium kuhlii* の紅紫の花も印象に残った。多少とも樹冠が疎になっていると，*Carex* が目についたが，この登りにかかってから，再び林内は暗くなって，写真が撮りにくくなった。

木の葉越しに，ゲデの山頂が下になったのに気付き，ぶざまな這い登りに飽きた頃，急に地衣をまとった梢が，青空に浮いて見えた。登りの終点である。日本なら岩に小さくしがみついているハハコグサが，1m以上の株になって，そこここと，木立の欠けた部分を，占領している。結実期で，花はひとつもない。旧火口の草原に達する。その大部分はチゴザサ *Isachne*

であると Noerta 老はいう。一部火災の跡が認められるので，きくと，昭和31年に焼けた由。廃絶して20余年になる気象観測小屋は，もはや建物の態をなしていないが，そこに坐り込んで，手近なところで，目立つ植物を集めてみた。ハハコグサ *Anaphalis javanica* の他には，ヨモギ，コケモモ，シラタマノキ，カナメモチ，オトギリソウ，イチゴなど。黄花で，爪のような葉の *Oenothera*，卵型の厚い葉をもった *Rapanea* も，私の手控の中に挾み込まれて，残っている。

この山頂では，平均気温 9°C，周年ほとんど変化せず，年降水量は 3,300mm 内外。チボダスに等しく，Kandang Badak より 500mm 程少ない。多年性の *Anaphalis* が，50cm ばかりに成長するのに数10年を要するという。大きいのは，ハハコグサばかりではない。例えば *Vaccinium laurifolium* の葉の長径5cm以上，*Photinia noboriaus* では 13cm 以上ある。

上に挙げてきたような高山植物の存在は，熱帯島嶼としては，例外の現象らしい。あの Wallace 先生でさえ，文久元年，この山に登った記録では，動物のことは忘れて，専ら植物に饒舌を振っておられる。私が不慣れな草木名を書立てているのも，Noerta 師範の存在もさることながら，誰にも，そのような異常を誘発するだけの力を，この山が持っているからである。

3

ここで観察することと，写真を撮るのを打止にして，資料採りを始めた。両日を費した下山の途上，標高差200m毎に，1.5ℓ，4点ずつ土を掘取る。これは手持の器具と，残る滞在日数から割出した最大可能処理量に，ほぼ等しい。

この土から出た動物数は，1万を少し超える。土の量からいうと，あまり多くはない。同じ処理法によった北タイの山のものに較べれば，かなり少ない。この地域での採集品であるから，いわゆる新種が相当数出ているのは，しごく当然のことである。しかし，植物にみられるような多彩さ，豊かさは，なかったといってもよいかと思う。もっとも，黒川博士の地衣類調査（昭和39年3月）でも同様の結果が出た由で，しかも地衣相の標高に伴う推移と，土壌動物のそれとが，かなりよく似ているのは，面白い。

この山での，土壌動物群の構成を，標高を追って，比べてみると，種数も個体数も豊富な1,800～2,000mまでの地帯と，逆に真に貧弱な2,400～2,600m以上の地帯とが目立った対照を示している。前者は明らかに熱帯降雨林に対応するもので，同一方法を用いた私のタイ，マラヤ，ボルネオの降雨林での結果と，質，量共によく似ている。ここでは，南の土壌動物の代表とみなしうる主だった目や亜目は，一通り揃っている。温泉の少し下が限界に当り，引続いて遷移層に入るものと思われる。小型のマルトビムシの一群 *Megalothorax* がここでは多い。2,400m以上ではミミズの類が優勢で，節足動物は目立って貧弱であった。この層は見かけ上，高山植物を含む山岳林帯に対応しているが，ネパール，タイ，日本などでの結果からみると，かなりの不毛地域に等しく，常緑の森に被われたところとは思えない。

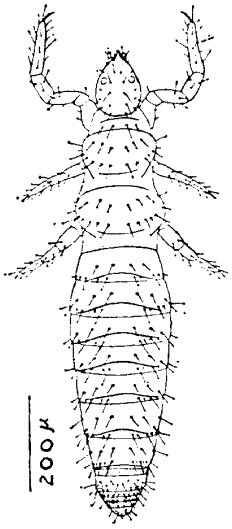


図 1 東南アジアの Protura（原尾目）の1種 *Acerentulus phrachedee* IMADATÉ

私が特に興味を持っている Protura という小さな節足動物は，この山では熱帯降雨林帯からしか見出されなかった。この動物は，現在までに，アジア各地から約100種，内，熱帯圏からは，タイ，マラヤ，ボルネオを中心に40種ばかりが，知られている。今度の Pangerango の土の中からは，8種が発見されたが，特にこの山ないしはジャワの特異性を強調するに足る種は，含まれていない。この内2種類は，温帯アジアにまでひろく分布しているもので，残る6種の中に，未知種が2つある。しかし，これはジャワ島内の他の地点でも採集しているし，タイ，マレーからよく似

た種が記録されているので，特に注目すべきものでもない。熱帯アジア固有と考えられるのは次の4種。*Acerentulus phrachedee* はベトナム，タイ，マラヤの各地で，*Gracilentulus malaysiensis* はベトナム，マラヤ，ボルネオの低地で，かなり普通に見出されている。*Eosentomon gimangi* はボルネオから記載された種で，これもやはり熱帯降雨林のものである。*Silvestridia hutan* はボルネオの低地林で発見された

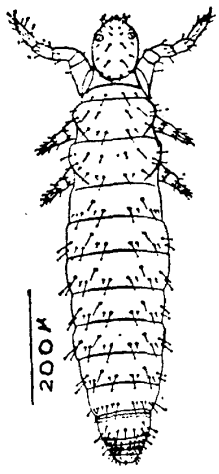


図 2　*Silvestridia hutan* IMADATÉ

種であるが，今度の旅ではこの山の他，Lawu 山の中腹や Dieng といった1,700～2,000mの高所でだけ見出された。このように，マレー，ボルネオ低地に多いものが，ジャワでは低いところにいなくて，高地だけで見つかっているのは，そうした種が人間の攪乱に弱いということなのかもしれない。日本の Protura の中にも，手ひどく伐りひらかれた後も，相変らず生残ってゆくものと，さっさと姿を消すものとがある。*Eosentomon sakura* といったような種が，逞しい方の，*E. asahi* などが弱い方の代表種と考えられる。

だいたい，私の仕事なるものは，手短かにいうと，現地では土を掘って，担いでくるだけのことである。その中に，何が，どれだけいるかは，何カ月も先になって，やっと判る。だから，帰り道が，他の人よりは，余計に楽しい，ともいえる。うるさい位の鳥のさえずりの中を，採集品の出国法について，いろいろと思案しながら，かなり満ち足りて，私は山を下った。

チボダスに戻ると，大柄なアメリカ娘が，ジャカルタの親の宿所に帰るんだと，だだをこねていた。Nengah 氏の意向を察し，下山後2時間ばかりで，この17才の乙女と二人で植物園を出た。臨検に会う。この女性は，あまり現地の言葉が判らぬらしい。発育のいい白人娘と，ただでさえ小さい私との道行である。検閲意慾をそそるに十分だったらしい。

二度，三度と旅券を出して見せねばならぬ多少うっとうしい経験を経て，御霊の国プリアンガンを脱する。峠をこえれば，目の下に，夕もやに包まれた村や町が，のどかに拡がっていた。

追記：本稿は，京大吉井教授・東海大学酒井講師によるインドネシア地域研究の予備調査に随行した記録の一部である。両氏は，既に本誌3巻5号，110～121および4巻1号，111～118に，それぞれ報告を発表しておられる。Pangerango 山の地図は，手帳に残しておいた記録と記憶とから構成したので，必らずしも正確ではない。また，本文の中の図は拙稿 Nature & Life in SE Asia, 4: 195～302 (1965) から採った。草木名は，すべて，京大荻野和彦助手の校閲を経た。記して，謝意を表する。